

[研究ノート]

外国籍の親と子どもたちへの食育活動について

— 豊田市保見地区での実践報告 —

A Report on the Action taken for *Syokuiku* (Food and Nutrition Education)
for Foreign Parents and Children in Homi, Toyota City

野 田 雅 子

Masako NODA

Studies in Humanities and Cultures

No. 16

名古屋市立大学大学院人間文化研究科『人間文化研究』抜刷 16号
2011年12月

GRADUATE SCHOOL OF HUMANITIES AND SOCIAL SCIENCES

NAGOYA CITY UNIVERSITY
NAGOYA JAPAN
DECEMBER 2011

[研究ノート]

外国籍の親と子どもたちへの食育活動について

—豊田市保見地区での実践報告—

A Report on the Action taken for *Syokuiku* (Food and Nutrition Education) for Foreign Parents and Children in Homi, Toyota City

野田 雅子
Masako Noda

1. はじめに
2. 食育基本法と外国籍の子どもの就学状況
3. 食育活動の組み立て
4. 活動の内容
5. まとめ

要旨 昨今盛んに行われている子どもへの食育活動があるが、外国籍の親や子どもたちにおいては十分な活動がなされているとはいえない。出身国を離れ来日して以後、日本の社会に適応し、一緒に来日した子どもたちの健全な成長のためにも、食育は重要であると考え。愛知県は全国的にみても外国籍の人口が多い有数の地域であり、外国人問題が顕在化している近年の動きの中で、外国人の子どもたちの食生活の見直しは見逃すことができない問題のひとつであると考えた。そこで、県内でも外国人世帯の割合が多い豊田市保見地区において、外国籍の親や子どもたちへの食育活動を開始した。

本稿では、ある学校で継続的に行った4回の食育活動の実践をもとに、外国人が抱える食の問題とその解決策を探るとともに、日本語の言葉が不自由な外国人に効果的な食育活動とはどんなものであったのかを報告する。

キーワード：食育、外国人、外国籍、子ども、調理、日系定住外国人

1. はじめに

国民が生涯にわたって健全な心身を培い、豊かな人間性を育むことができるようにするため、食育を総合的、計画的に推進することを主な目的として、平成17年に食育基本法¹が施行された。

¹ 食育基本法は、平成17年（2005年）6月10日に国会で成立し、同年7月15日に施行された。

その後、専門委員によって食育推進基本計画が策定され、各自治体や教育機関を中心に食への国民活動が啓発されていった。内閣府が発表している調査結果²⁾においては、平成22年度における食育に関心を持っている国民の目標値を90%以上とし、平成17年では国民の69.8%³⁾であったのに対し、平成20年では75.1%⁴⁾と増加し、食育という言葉や活動が浸透していったことがわかる。このような国民活動のさなか、愛知県の平成23年6月末現在の外国人登録者数は201,402人⁵⁾で、12年前（平成11年）と比較すると、約1.6倍増加している。国籍（出身地）別にみると、最も多いのはブラジルの67,162人、2位の中国が47,099人、3位の韓国・朝鮮は40,643人である⁶⁾。このような外国人登録者数の国内総計は、平成23年3月末には2,093,938人、県別の集計では、東京都409,583人、大阪府206,063人、愛知県201,402人となり、愛知は国内で3番目に外国人の多い都市⁷⁾であることに注目しなくてはならない。日系定住外国人の増加もあいまって様々な問題が顕在化しつつある昨今、生活の基盤となる食生活を健康的なものにするためにも、外国人への食育を考えなくてはならない時期がきているものと思われる。

本稿では、外国人への食育活動を通して、彼らが抱える食への問題を見出し、それを改善できるような実践活動を報告する。

2. 食育基本法と外国籍の子どもの就学状況

平成17年に施行された食育基本法は、「二十一世紀における我が国の発展のためには、子どもたちが健全な心と身体を培い、未来や国際社会に向かって羽ばたくことができるようにするとともに、すべての国民が心身の健康を確保し、生涯にわたって生き生きと暮らすことができるようにすることが大切である。子どもたちが豊かな人間性をはぐくみ、生きる力を身に付けていくためには、何よりも「食」が重要である。今、改めて、食育を、生きる上での基本であって、知育、徳育及び体育の基礎となるべきものと位置付けるとともに、様々な経験を通じて「食」に関する知識と「食」を選択する力を習得し、健全な食生活を実践することができる人間を育てる食育を推進することが求められている。もとより、食育はあらゆる世代の国民に必要なものであるが、子どもたちに対する食育は、心身の成長及び人格の形成に大きな影響を及ぼし、生涯にわたって健全な心と身体を培い豊かな人間性をはぐくんでいく基礎となるものである。⁸⁾」とされている。これを受けて、文部科学省でも学校教育を通じて積極的に学齢期の子どもたちへ向け、各所で食

²⁾ 「食育推進基本計画における食育の推進にあたっての目標値と現状値」内閣府、平成21年3月現在。

http://www8.cao.go.jp/syokuiku/about/plan/moku_gen/index.html

³⁾ 「食育に関する特別世論調査」内閣府、平成17年7月。

⁴⁾ 「食育に関する意識調査」内閣府、平成20年3月。

⁵⁾ 「都道府県別国籍（出身地）別外国人登録者」法務省、平成23年6月。 <http://www.moj.go.jp/content/000077405.pdf>

⁶⁾ 「国籍別年末現在外国人登録人員の推移」愛知県、1999～2009年。 <http://www.pref.aichi.jp/0000037819.html>

⁷⁾ 前掲「都道府県別国籍（出身地）別外国人登録者」法務省、平成23年6月。

⁸⁾ 「食育基本法」前文より。

育活動を推進しているところである。

しかし、現在日本で学校に通っていない学齢期の子どもたちが存在しており、その彼らが十分な食に関する教育を受けられていないという事実がある。愛知県がまとめた県民意識調査⁹によると、学齢期の子どもがいる外国人の県民で、子どもを学校に通わせているのは約8割であるという結果が出ている¹⁰。従って、残りの2割は未就学の子どもたちということになる。また、学校に通っている子どものうち、日本の公立学校に通っているのは、そのうちの7割であり、それ以外はブラジル人学校、韓国学校、朝鮮学校、中華学校、日本の私立学校である¹¹。子どもを学校に通わせていない理由としては、言葉の問題や、母国語の教育を受けられる学校が近くにならない¹²、などであるが、1990年の入管法改正以後、増加し続けた外国人労働者問題は、子どもへの教育においても大きな影響を及ぼしている。愛知県は、全国的にみても、外国人登録者数では有数の県であるので、この子どもたちの問題を放置しておくわけにはいかないと考える。食育においても、学校教育が成り立っていない前提では、家庭がその一端を担うことになると思われるが、実際には労働で多忙になりがちな生活の中では、難しいと思われる。

愛知県内には、外国人の多い特定の地域が数箇所ある。豊田市保見地区はその代表的な地区であるが、そこで学校に行っていない子どもたちを集めて日本語教育を施しているNPO団体がある。特に、ブラジル人、フィリピン人、中国人の割合が多い学校だが、多い時には30人を超える子どもたちを有する学校である。（以下、T校とする。）このT校において、子どもたちの食生活の乱れが著しいとの関与者からの問題提起があり、2010年3月から筆者を中心とする構成員による食育活動をし始めた。詳細は次に示す。

3. 食育活動の組み立て

3-1. 構成員

食育指導を始めるにあたり、食育活動を指導的に行う構成員として、プロジェクトチームを結成した。構成員としては、T校の責任者や教師をはじめ、外部から管理栄養士、社会福祉士、元家庭科教員、元英語教師、調理師、そして看護師の資格を持つ者を集め、合計10人で立ち上げた。各分野の専門家が参加したことから、それぞれの専門分野を生かしての指導が可能となった。加えて、構成員がこの地域付近に住んでいることもあり、相互の連絡が取りやすいのも利点となった。

⁹ 「愛知県の多文化共生に関する県民意識調査報告書」愛知県、pp. 38-42、平成22年3月。
<http://www.pref.aichi.jp/0000031057.html>

¹⁰ 前掲 p. 38

¹¹ 前掲 p. 39

¹² 前掲 p. 42

3-2. 食育の課題

あらかじめT校の子どもたちが置かれている食生活の状況を知るために、子ども本人や保護者、T校の先生方からの聞き取りを行ったり、T校のランチタイム時などに訪問し現場を見たりして現状を把握した。この結果、3つの課題が指摘された。

まず、生徒のほぼ全てにイえることは、生活習慣が乱れていることである。幼い頃に身に付けたいとされる起床や就寝、食事の時間などが習得できていないと思われる。こうした基本的な生活習慣の乱れが、学習意欲や体力、気力の低下の要因の一つとして考えられているため、基本的な生活習慣の重要性を理解できるようにすることが、まず第一の課題としてあげられた。

次に食事の内容を把握した。絵を描いてもらったり、聞き取りをしたりして、何をどれだけ何時ごろに食べているかを調査した。結果としては、自分の好きなものを好きなだけ好きな時間に食べている傾向が強く、栄養バランスもあまり取れていないようである。中食¹³もみられた。この結果から、何をどれだけ食べるのか、という栄養学的見地における根拠を知らないということがその行動に反映していると思われた。従って、学童期の理想的な食生活を理解させなくてはならないということが、2番目の課題となった。何をどれだけ食べたらいいのか、また栄養素の知識に関する学習を日本では家庭科の授業で習うものだが、ブラジルや中国などの国においては、小学校・中学校にあたる課程で日本の家庭科という教科に当たる教科が存在しないことが判明した。このことを検証するため、あいち国際プラザの多文化共生センター¹⁴にいるブラジル人相談員へ話を聞きに行ったが、確かにブラジルでは日本の家庭科に相当する教科はないとのことであり、栄養に関しては、理科系の授業で学習はするものの、調理実習などの実践教育は全くないとのことであった。ブラジルでは、実践教育は家庭でなされるのが前提のようだが、家庭で食の実践教育がないとなると、子どもたちは知るすべがないことが明らかになった。

3番目の課題は、保護者が不在でも子どもたちだけで、食事の準備ができるようにすることである。子ども自ら調理することが困難な場合は、スーパーなどから中食として適切な食品を選択し、購入できる能力を身に付けさせるようにすることである。一方、自ら調理が可能な子どもの場合は、経済的かつ簡単・安全に調理できる調理法を身に付けさせるべきとした。

上記のように、①基本的な生活習慣の重要性を理解できるようにする、②学童期の理想的な食生活を理解させる、③子ども自身で正しく食品が選択できたり、簡単な調理ができるようになる、以上3点の課題が設定され、これらの対策を講じるための実践を行った。

¹³ スーパーなどで調理済み食品を購入して家庭で食べることをいう。近年は仕事を持つ保護者の増加などによる家庭生活の変化により、中食は増加傾向にある。この中食に対し、レストランなどで食べることを外食、家庭で調理した手作りのものを食べることを内食という。

¹⁴ 公益財団法人 愛知県国際交流協会主管。名古屋市中区三の丸二丁目6番1号、愛知県三の丸庁舎1階にある。聞き取りは、平成23年2月7日に行った。

4. 活動の内容

4-1. 第1回目

日時 2010年3月11日（木） 9.30-14.30

場所 公共施設の調理室とセミナー室を借りる。

- 目的
1. 生活習慣と健康のチェックと見直し
 2. 食べ物の栄養について知る。
 3. 子どもたちでもできる簡単な調理実習

対象 T校の子どもたち 21名

- 内容
- ・身体測定（身長・体重・BMI測定）
 - ・栄養の話（栄養素の働きについて、食品サンプルを使って何をどれだけ食べたらよいのか、朝ごはんの重要性、野菜の手ばかり栄養法）
 - ・生活習慣アンケート
 - ・調理実習（マカロニチーズ、簡単ラスク、野菜サラダ、果物の盛り合わせ）
 - ・健康相談

子どもたちからの感想（感想を書いて提出してもらった内容）（ ）内は、国籍と性別。

- ・調理室でたくさん調理できて将来へのいい経験になった。チーズの味は、自分にとってはなじみがないが、みんながおいしいと言って食べている姿を見て、とてもうれしかった。（中国 男子）
- ・マカロニは、美味しくない。野菜は嫌いなので食べなかった。でも果物は好き。苺がおいしかった。（フィリピン 女子）
- ・みんなと作ってとっても楽しかった。おいしかった。（ブラジル 男子）
- ・ラスクが一番おいしかった。野菜は嫌い。（フィリピン 女子）
- ・みんなで楽しく手伝いあって作ったので、とても楽しかった。普段は料理しないが、今日覚えたものを家でも作りたい。（ブラジル 女子）
- ・野菜は食べなかった。他はおいしかった。（ブラジル 男子）
- ・食品サンプルがあったので、キャベツの話がよく理解できた。（ブラジル 男子）
- ・チーズの味は良くないし臭いから調理室を出た。ラスクはおいしい。たくさん食べた。（中国 男子）
- ・マカロニチーズはおいしかった。野菜はおいしくなかった。今日は楽しかった。（ブラジル 男子）
- ・料理は楽しい。おいしかった。野菜はあまり食べないので、これを機会に食べるようにがんばる。

ばる。たくさん運動もします。

- ・マカロニチーズはまずかった。野菜はきれいだから食べた。ラスク、苺はおいしい。楽しい。
(中国 女子)
- ・私は食欲がないし、口に合いそうなものもなかったので全然食べなかったけど、みんなが食べている様子を見て、とてもうれしかった。(中国 男子)
- ・簡単だった。素晴らしい。明日から野菜をたくさん食べよう。(フィリピン 女子)
- ・料理を覚えた。ラスクも作った。面白い一日だった。(ブラジル 女子)

今回は、初回ということもあり、まず食べることに興味を持たせ、正しい食生活が健康につながるということを認識させることができたと思うが、この認識が実生活の中にどれだけ反映させることができるかが今後の課題である。野菜が嫌いな子どもや、食事のマナーを身に付けていない子どももいたので、それを改善するような方策も必要である。女の子の中には、ダイエットに興味があり、実施方法を積極的に聞いてくる子もいた。子どもたちのほぼ全員が好きだというポテトチップスのカロリーや油分、塩分の量を説明し、安易にスナック菓子を食べないよう喚起した。樹脂製の食品サンプルの現物見本は言葉の理解が難しい子どもにとって、視覚的に有効であった。

4-2. 第2回目

日時 2010年10月8日(金) 10.00-13.00

場所 T校にて実施。

- 目的
1. 日常飲んでいる飲料の糖度調査
 2. 健康的な飲料について知る。
 3. 砂糖の過剰摂取がもたらす体への影響を知る。
 4. 子どもたちでもできる簡単な調理実習

対象 T校の子どもたち 15名

内容 ・嗜好飲料の糖度検査

日常的に飲まれている、コーラ、ガラナ¹⁵、ファンタ、水など20種類の糖度をはかり、健康的な飲料なのかどうなのかの判断をする。

- ・調理実習(ホットドッグ)
- ・砂糖の過剰摂取と健康の話聞く。

子どもたちからの感想

¹⁵ ブラジルの炭酸飲料。

- ・好きなジュースにこんなに砂糖が入っているなんて、びっくりした。体に良くない。（フィリピン 女子）
- ・多くの砂糖が入っているのにおいしいが、飲むことをやめたいと思った。（ブラジル 男子）
- ・よかった。砂糖が多いんだ。もうジュース飲めない。（ブラジル 男子）
- ・これからできるだけひかえるように心がける。（中国 男子）
- ・不健康なのはわかったが、好きだから飲むことはやめられない。（フィリピン 女子）
- ・ホットドッグは簡単に作れておいしいが、名前が不思議。（中国 男子）

子どもたちは日常的に一日約1リットルの嗜好飲料を飲んでいるようである。それらの糖度をわからせるためにデジタル糖度計で糖度を計測し、数値を黒板に書かせた。計測器は瞬時に数値が表示されるので、誰にでも簡単にわかりやすい形で砂糖の分量を知ることができた。砂糖の過剰摂取は体内にどのような悪影響を及ぼすのか、人体の絵を使って説明し、いらいらしたり、学習意欲の低下など精神的にも影響を与えることを理解させた。T校の子どもたちは水筒にお茶を入れて携帯するようなことがないので、のどが渇くとすぐに好きなジュースを買って飲んでいる。そのため、健康的な水分補給のためには何を選ぶかを学習させた。子どもたちは習慣的に甘い飲み物を飲むことが多くなってしまっているため、この習慣を変えさせる工夫が今後必要だと思われる。おなかすいた時には、食物を食べるより、飲み物でカロリーを補っている食が細い子どもがおり、食べることに意欲がないようであった。自動販売機など身近で飲み物を安易に購入できる環境にあることも難しくさせている。コーラはブラジルより日本で買う方が安いらしく、しかもアメリカ的なしゃれたイメージがあるため、よく飲まれていることもわかった。

子どもたちで簡単に調理して食べられるホットドッグの調理も行ったが、野菜も食べられるように、野菜炒めを多くはさんだものにした。この調理はホットプレートを使用し、電化製品の扱い方も理解させた。ケチャップやマスタードのような、ホットドッグに付随する添加物の過剰な摂取に関しても気を配らせた。調理実習は、とにかくテンションが高揚するようで、いつもの教室がとてにぎやかになった。

4-3. 第3回目

日時 2011年2月18日（金） 9.30-14.30

場所 公共施設の調理室とセミナー室を借りる。

- 目的
1. 健康調査
 2. 子どもたちでもできる簡単な調理実習

対象 T校の子どもたち 30名

- 内容 ・身体測定（身長・体重・BMI算定）
- ・健康相談
 - ・調理実習（照り焼きチキンと焼き野菜のピタパン、チョコレートブラウニー、果物）

子どもたちからの感想

- ・ピタパンが面白い。おいしい。いっぱい食べた。（ブラジル 男子）
- ・チョコレート好き。みんなで作るのは楽しい。（ブラジル 男子）
- ・いっぱい食べた。妹にお土産も作った。（ブラジル 男子）
- ・いろいろな野菜が入っていたが気にせずに食べられた。（中国 男子）
- ・肉が好きだけど、野菜は嫌い。（フィリピン 女子）
- ・体のことが相談できて良かった。（フィリピン 女子）
- ・盛り付けが綺麗にできて、ほめられたのがうれしかった。（フィリピン 女子）
- ・ピタパンは初めて食べた。（ブラジル 男子）
- ・日本にはバレンタインディがあり、チョコレートをプレゼントするということを知った。（中国 男子）

健康と食べ物のかかわりについては、1年前よりも意識付けがなされているようであった。子どもの方から、「野菜を食べているよ。」と話しかけてくれる子どももいた。また、野菜を食べるために、昼食時に野菜の漬物を買って食べている子ども見られるとのことだったが、塩分の過剰摂取にならないような指導もしないといけないことも明らかになった。

国によってなじみのある食べ物やそうではない食べ物がはっきりしているが、調理実習とその後の試食を一緒にすることによって自然に馴染んでくるようである。新入りの子どもも、実習を一緒にすることで人間関係が円滑化する効果もある。実際、家庭に帰れば家族そろって食事することはあまりない子どもたちでも、この実習のように大勢で食べれば楽しく、また食べる時のみんなの笑顔がいいので、より一層幸せな気持ちになれると話している子どももいた。食に関心がなく、食べる意欲のない子どもも、共通体験としての楽しい食事を知らないだけということも考えられるため、このような活動を通して、食への関心を持ってもらうことができた。その他、普段何気なくしている食行動、例えば、皿への盛り付けや、スプーン、フォーク、箸などカトラリーの持ち方なども、他の子どもとの比較もでき、適正な量や、食事のマナーなど、食にまつわる様々な勉強もできているようである。

4-4. 第4回目

日時 2011年3月11日（金） 15-17.30

場所 公共施設の調理室とセミナー室を借りる。

- 目的
1. 日本の学校生活、特に給食を知る。
 2. 学校に持っていくお弁当作りを実習。
 3. 栄養相談

対象 小学校入学を控えた子どもと親 10組23人

- 内容
- ・子どもと親へ、就学前の心構えをさせる¹⁶
 - ・学校給食の話を聞く。
 - ・調理実習 お弁当作り（ごはん、おにぎり、ウインナーの飾り切り、厚焼き卵、ゆで野菜、オレンジの飾り切り、お弁当箱への詰め方、適切なご飯の分量）
 - ・食品衛生と食中毒についての話
 - ・健康と栄養の個別相談

親子たちからの感想（親は全て母親だった）

- ・学校に持っていく弁当作りが心配だったが、よくわかった（ブラジル）
- ・おかずをしきって入れるのには驚いた。（ブラジル）
- ・弁当箱に詰めるご飯の適量がわかった。今まで詰めすぎだった。兄にお土産も作った。（ブラジル）
- ・野菜の食べ方がわかった。（ブラジル）
- ・厚焼き卵が作れるようになってうれしい。早速卵焼き器を買いたい。（ブラジル）
- ・卵焼きは以前からやっても、いつも上手にできなかったが、今回でコツがつかめた。もう失敗しない。（ブラジル）
- ・ケーブルテレビの取材が来ていたので緊張した。（ブラジル）
- ・他の家族と話ができたのが、何よりうれしい。（ブラジル）
- ・ウインナーをタコにしたり、カニにしたりする飾り切りが、簡単にできて楽しかった。（ブラジル）
- ・熱いうちにお弁当のフタをしてはいけないとは、知らなかった。気を付けたい。（ブラジル）
- ・親子調理が楽しかった。子どもが喜んでいた。（ブラジル）
- ・高脂血症と医師から言われたが、どう食事を改善したら良いのかわからず悩んでいたが、栄養士さんからの個別指導を受けられたので、これから気をつけたい。

日本の学校で勉強するようになって困ることのひとつが、お弁当作りである。中国やブラジル

¹⁶ 愛知県のプレスクール事業の一環として実施。

には学校へお弁当を持参する習慣がないので、全くわからないのである。従って、お弁当箱も準備して、まずはお弁当箱とはこのようなもので、どこに売っているのか、というところからの説明を行った。

日本の子どもたちがどんなお弁当を持っていくのかを良く知らないために、日常的に家で食べているものを詰めて持たせたところ、それをきっかけに学校でのいじめが発生して、不登校になったという話もあるので、代表的な日本のお弁当のおかずの作り方を知ってもらった。ご飯とおかずを詰めるバランスも、重さをはかりながら確認してもらった。指導者が実際に家庭で作っている子どものためのお弁当の写真を見せて、子どものお弁当のスタイルを知ってもらった。大震災のすぐ直後からのスタートだったので、急遽参加を控えた親子がいたが、来場した参加者からはこのような活動を是非継続してほしいとの要望が強くあった。

5. まとめ

外国人が就労などで来日し、日本での生活が始まると、生活をめぐる環境が大きく変化する。食生活においては、栄養の偏り、不規則な食事、肥満や生活習慣病の増加、伝統的な食文化の喪失等、様々な問題が生じる場合がある。スーパーなどでの購入活動においても、言葉の不自由さから、塩と砂糖を間違えて買ったりするという話もまれではない。子どもにとっては新しい環境に戸惑い、学校生活を続けていくことが難しい場合も少なくない。定住外国人の増加にともなうて、多文化共生社会の構築をさらに身近なものとして考えねばならない時がきているが、人間の基本的な活動としての食を題材に、国境や言葉を超えた相互理解がはかれることが立証されたと感じる。

栄養のことを学習するとはいっても、体内でどうなるのかは実際には目には見えないことであるため、可視化をして確認する意味で食品サンプルの活用や、数値で確認することにおいては糖度計や電子ばかりなどにより、言葉の不理解を補う意味でも大変有効に働くことがわかった。調理実習と試食を通じて学ぶことは、単に料理の仕方を学ぶだけではなく、食べ始めや食べ終わりの仕方、食器やカトラリーの扱い方などの食事のマナーも身に付けることにもつながる。その他、クラスメイトに馴染んでいない新生が入習をきっかけに馴染めるようになるなどコミュニケーションの円滑化にもつながったり、食を通じた異文化の理解も可能である。嫌いな食材でも、友達が愉しく食べている姿を見て自分も食べられるようになったり、普段家庭では個食でも、大勢の人と一緒に食べる楽しい機会があると、食への関心も沸いてくるようである。またこのような実践教育は、家庭で家事を担っている子どもにヒントを与えることができたり、ダイエットの正しい知識を得るなど、食育活動を通じて習得できることは多いことが検証できた。日本の教育課程にある食育などの家庭科教育は、生活環境の変化により家族の形態が変わっていく昨今におい

て、大変重要な科目であると再認識することにもなった。

多文化共生社会を目指し、今後ますます理解を高めるためには、このような継続的な活動が必要だと考える。特に、グローバリゼーションの中で、外国から来た子どもたちが取り残されないようにし、健康的な生活を維持していってもらうためにも、生活の基盤となる食は重要であり、そのための食育も必要となる。今回の食育活動の課題は、①基本的な生活習慣の重要性の理解、②学童期の理想的な食生活の理解、③子ども自身で正しく食品が選択できたり、簡単な調理ができるようになる、という3点があった。わずか4回の活動だけでは、十分とはいえないが、それら課題への意識付けにはなったと思う。

今後の課題としては、伝統料理の継承も民族意識の中では必要であると考えられ、ブラジル・フィリピン、中国などから来日した外国人同士の地域活動も大切になっていくのではないかとと思われる。地域住民との交流も、地域で子どもを見守っていく上でも重要であると考えられ、地域の農家から野菜の生産や収穫活動を手伝わせてもらったり、近隣の住民との交流は、外国籍の子どもたちにとっての食育の新たな試みとして考えていきたいと思う。

参考文献

- 「愛知県の多文化共生に関する県民意識調査」、愛知県、平成22年。
生原良幸、『ブラジル』世界の子どもたち15、偕成社、1987年初版、1991年4刷。
大谷かがり他、『日系ブラジル人の子どもの健康を守る活動報告』、中京大学現代社会学部斎藤研究室、2007年。
「大人も子どもも注意すべき清涼飲料」、『食べ物文化』No.419、pp.8-37、2010年7月号。
銀城康子、『ブラジルのごはん』、農山漁村文化協会、2008年。
鈴木晶子他、「小学校家庭科における問題解決的な学習を取り入れた調理実習授業の開発」、『広島大学研究紀要38』、pp.217-222、2010年。
立松洋子、「食生活改善のための調理実習献立の検討」、『別府大学短期大学部紀要26』、pp.83-100、2007年。
山下満智子、「食育セミナーによる社会貢献活動」、『日本調理科学会誌43巻4号』、pp.271-274、2010年。

インターネット検索

「食育推進評価専門委員会「審議経過報告書」食育推進基本計画における食育の推進にあたっての目標値と現状値（平成21年3月）」内閣府。

http://www8.cao.go.jp/syokuiku/about/plan/moku_gen/index.html

<http://www8.cao.go.jp/syokuiku/more/conference/evaluation/h21keika/pdf/s1.pdf>

（研究紀要編集部は、編集発行規程第5条に基づき、本原稿の査読を論文審査委員会に依頼し、本原稿を本誌に掲載可とする判定を受理する。2011年10月11日付）